

思い出の先に

森 井 祐 介

(2003 年度 B, 2005 年度 M, 2008 年度 D)

英文科との最初の出会いは、関学高等部から大学に上がる時に受けた面接である。二月の寒い日だったと記憶している。もう 15 年近くも前のことなのにこの時のことは不思議と鮮明に覚えており、面接官は福岡忠雄先生と馬場美奈子先生だった。もちろん先生方のお名前や専門分野について知るのは入学後のことである。入学後は方向性の定まらないまま二年間を過ごしたが、映画好きだったこともあり演劇であれば相通ずるものがあるのではないかというような、今考えるとよく分からない理由で、小澤博先生のゼミに入った。芝居に関しては何も知らなかったが、三年春学期の教科書になっていた『リチャード三世』を毎回数時間かけて予習し、シェイクスピア劇の台詞が持つ重層的な意味の拡がりに感動した。この時点ではまだシェイクスピアや関学英文との付き合いがこれほど長く続くとは思ってもいなかった。

大学院に進み、それまでは何かを提出する際に立ち寄るだけだった英文研究室も、馴染みの深い場所になった。頻繁に資料を借りに行ったり他の院生仲間や先生方と話をしたりと、特に後期課程に入ってから英文研で過ごす時間が長くなった。この英文研が持つ独特の雰囲気は、学部に入学した当時からほとんど変わっていない。エアコンやパソコンといった機器が新調されソファや時計が新しくなった他は、壁一面に並べられた様々な辞書、研究書、学術雑誌の類が長く続く学問の伝統と重みを醸し出している。そうかと言って威圧的で重苦しい空気を発しているわけではなく、中央芝生に向かう大きな窓からは十分な陽光が取り込まれ、研究室全体が穏やかな明かりで満たされている。

さて、学部とは違った少人数で受ける院の授業は緊張感が違った。作品を

読むことに加えて、資料を咀嚼し自分の議論を組み立てていくということを、様々な先生方の授業で学んだ。授業や研究での緊張は、英文研で過ごすゆるやかな時間が解いてくれた。時の経つのは速いもので、大学院の修士と博士の五年間もあつと言う間に過ぎ、学生としての関学英文との関わりは終わりを迎えた。それでも学部と院で合わせて九年、この時点で人生の三分の一を関学の学生として過ごしてきたのである。

長い学生時代を終え、大学院研究員および非常勤講師として関学英文と関わるようになったが、学生気分が抜け切らないのかあまり大きな変化を感じなかった。ひとつには院の授業に出続けていたこともあり、またひとつには純粋な意味で学生でなくなったとしても、研究のために勉強を続けるという意味ではそれまでと然程の違いがなかったためでもある。もちろん、講師の仕事に関しては、人に教えるのがまったく初めてだったこともあり悩みは尽きなかった。こんなことなら、学生時代に授業のやり方をもっとしっかり見ておけばよかったと思ったものの、後悔先にたたず、英文科の学生を含めた文学部の学生たち相手に、試行錯誤で授業を行う結果となった。また、博士課程を出て三年間は博士論文を書くという大きな目標があった。これはもちろん、基本的には一人でコツコツと行うものだったが、小澤先生の指導や他の英文の先生方、院生・研究員の方々からの助言や励ましがなければ、最後まで書くことはできなかっただろう。学生を終えた後のほうが関学英文との学問的・精神的な繋がりが強まったといっても過言ではない。

しかし、学位を取って三年が経過した今、その繋がりが居心地の良さに安住してはいけなと強く感じている。何と既に人生の半分近くをここで過ごしてきた。十分に長い時間だと言っている。関学英文を離れて思う故郷にできるよう、これまで教わったことを生かして外に出て行きたい。